
2人の転生者 ナルトs i d e

エミリア & 志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人の転生者 ナルトside

【Nコード】

N2936M

【作者名】

エミリア&志保

【あらすじ】

ごく普通のありふれた2人の少年はある日突然死ぬことになった。そして、死後の展開は王道とも言うべき転生・憑依。2人の紡ぐ物語は原作に近く、遠いもの。

果たして、原作キャラにチート系主人公である2人に敵う存在はあるのか？

最強系ご都合主義SSの開幕です。

プロローグ（前書き）

どうも。(^ _ ^) /

カメです。(笑) じゃなくて、志保です。(^ o ^) /
大変長らくお待たせしました。

では、プロローグをどうぞ!!

ブローグ

突然だが、俺は死んだ。……正確には“俺たち”だ。俺だけでなく、友人も一緒に死んだ。そして、俺たちは世間一般で幽霊と呼ばれる存在になった。

ちなみに、幽霊になった俺たちが現在何をしているかと言うと、スプラッターとなった元・俺たちの身体を見下ろしている。

「これはひどいな。吐けるものなら吐きたいけど、幽霊の俺らには叶わんか」

「その辺りはしょうがないから諦めた方がいいんじゃないか？」

「んなこと、分かっとなるっちゅうねん！」

取り敢えず、俺たちがこんなことになった経緯を話さなければならぬか……。あー…、俺と友人は久し振りに会い、アニメイトやゲマズに行こうという話になった。

そして、目的地に向かって歩いていると、いきなり10tトラックが突っ込まれた。よくTVとかで自分の身に危険が及ぶと直前の動きがスローに見えると言うが、これは事実だった。

何故、そう言い切れるかというと、トラックが突っ込んでくる瞬間をスローに感じたからだ。ちなみにトラックのドライバーはエロ雑

誌を読みながら運転してた。

その結果、俺たちの身体は潰れたトマトみたいになった。恐らく、ネギまに登場する近衛木乃香でも回復させられないだろう。

ちなみに、トラックの運転手は俺たちの死体を前にしてうるたえている。ふっ…、自分の愚かしさを悔いるがいい。……さて、これからどうすればいいだろうか？

「セオリー的なもんを考えたら、死神や水先案内人が現れる所やな。俺は幽白のぼたんのキャラが現れることを期待する」

「何言ってるんだ！！ここはBLEACH的死神が現れるのが良いに決まってるだろ！！特に夜一さんや碎蜂が現れたら最高だ！！」

「アホか！！これやから90年代後半から始まったジャンプに毒された奴は……。話にならんわ！！」

「何だと！！」

俺たちが己の願望を全開にしたバカ議論をしていると、いつの間にか黒衣の外套を纏った4、5歳位の幼女がいた。

……今の俺の正直な気持ちを言おう。……殺してほしい。己が願望を前面に出した会話を幼女に聞かれるなんて、何という羞恥プレイだ。俺はそこまで堕ちた人間じゃない。

俺が自己嫌悪に陥っていると、幼女は俺の服を引っ張りだした。……いや、俺だけでなく友人の服も引っ張っていた。……付いて来いって言いたいのだろうか？

その場で呆けていたり罵り合っていても意味ないので、俺たちは幼女に付いていくことにした。

ちなみに、幼女の頭には Fate / stay night の真アサシンが付いている髑髏の仮面があった。新手のお洒落だろうか？そんなことを考えながらついて行くと、俺らは未確認生命体と遭遇した。

ボディビルダーの様なムキムキの体でポージングしている爺と会った。しかも、軽く日焼けをしており、健康的な一面をあからさまにアピールしている。

余りに気持ち悪く、吐きたくても吐けない為、口に手を当ててうな垂れるしかなかった。横目で友人を見ると、友人も余程気分悪くなつたためか、orz となっていた。その気持ちはよくわかる。さすがに俺も危うく現実逃避をしかけた。

俺たちのそんな状態を無視して、自分の筋肉を強調する様にポージングを変えながらクソ爺は話し始めた。

取り敢えず、クソ爺の行動を完全に無視だ。こういう時、GS美神の横島の煩惱補正が羨ましい。ちなみにクソ爺の話を要訳すると、こいつは神様のようで、更に俺たちは本来死ぬべき存在ではなかったらしい。

そして結論を言うと、罪滅ぼしに現在の記憶を持ったまま、新しい人生を歩ませてくれるそうだ。まあ、所謂よくある転生話らしい。

「あゝ…神さんや。俺らの転生する先って、どこや？」

「NARUTOの世界じゃ」

って、NARUTOかよ！？…おいおい、俺の知ってる漫画で致死率ランクベスト5に入る世界だぞ。どうせなら、もっと平和な世界とか無いのか？

「ちなみに憑依寄りの転生で、お主はうちはサスケ。もう一人の前はうずまきナルトになる」

「……おい。それは俺らに殺し合えって言っとるんか！！」

神を名乗るクソ爺っぽい未確認生物のキャスティングに思わず友人が叫んだ。ちなみに俺の中でこの未確認生物の評価は下がった。故にクソ爺から未確認生物に格下げだ。

「誰もそんなことは言つとらんわ。原作ブレイクでも何でも好きにしたらよい」

なんか、やたらと上から目線の物言いに頭に來た俺は、ドスを効かした声で未確認生物に言った。

「……おい。俺達の平穩な人生をぶち壊した揚句、そんな危険極まりない世界に転生させるんだから、それ相応の見返りは与えてくれるんだろっな？」

「うむ。お主らの希望する能力などを4つまで与えよう」

クソ爺（笑）の言葉を聞き、これからの事を考え、更なる質問をする。ちなみに未確認生物からクソ爺（笑）に格上げされたのは、俺の中での評価が少し上がったからだ。

「それは武器も含まれるのか？」

「当然じゃ」

そうか、武器も可か…。まあ、当然だな。それぐらいなければやってられないからな。俺、ナルトだしな。

そんな事を考えていたら、友人が早速望みを言い出した。つか、あいつこの先の事考えているのか？まあ、能天気なやつだし、どうにかなんとでも思っているのかもしれないな（w）

「やったら、まず俺の望みから言わせてくれ！！」

「うむ。言ってみい」

「まず、俺の開眼するであろう『写輪眼』に、『白眼』と空の境界に登場する『歪曲の魔眼』の能力を付けてくれ！！」

「ふむ…、分かった。ついでに生まれた時から『写輪眼』と『イザナギ』を使っても失明しない完全無欠な『万華鏡写輪眼』を使えるようにしてやろう。で、あと2つの願いは何じゃ？」

「鋼の錬金術師の錬金術。できれば、真理達成バージョンと家庭教師ヒットマンREBORNの？死ぬ気の炎？を使える様にしてくれ」

「了解じゃ。ちなみに？死ぬ気の炎？7つの属性を全て使えるようにしてやるう。ついでにボンゴレの超直感もな」

また、無理な願いを言ったな。しかも、通っているし。って言うか、あいつ…。さっき言っていたことと正反対なこと言ってるが！

「って、お前の方が90年代後半以降から始まったジャンプに毒されてるじゃねえか！！」

「五月蠅いわ！！リボーンは俺の正義なんじゃ、ボケ！！」
ジャステイス

呆れて、氣力が萎えた。

「……………もう、何も言わねえ」

だが、これでかなり無理な願いも聞いてもらえると思ったのは好都合だな。フ、フフフ……。これで俺の望むことが叶えられたら、敵なしだな。

「俺の望みを言う方がいいか？」

「うむ、言うてみい」

「では……。俺の望みは両儀式の『直死の魔眼』とギルガメッシュの『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』、幻海師範の『靈光波動拳』。あとは黒崎一護の第二段階の『虚化』。もちろん、角付きだ」

「お前！何で『靈光波動拳』やねん！！？」

「一々、五月蠅い奴だな。まあ、こいつの言ったことが切欠で思いついたんだがな…。これを得た時の特典をな…。」

「原点に戻ろうと思ったただけだ」

「俺に対する嫌がらせやろ!!」

その後、俺と友人は言い争いをした。補足だが、クソ爺（笑）は中々に憎いことをしてくれたみたいだ。

全性質変化と原作52巻までに登場した忍術の知識、それを扱えるだけの才能を与えてくれた。ま、プチ六道仙人だな。そして、言い争いが終わると

「では、転生させるぞ?」

神がそう言い出した。すると、友人が何を思いついたのか、神に質問した。

「ちょい待ってくれ」

「何じゃ?」

「いや、白の性別を確認したくつてな。男なん?それとも女なん?」

また、妙なことを普通、男になっているだろ？

「ふむ。今から行くお主達の世界は、正確には原作のNARUTOの並行世界じゃからな。白の性別は女となっておる。」

マジか！？性別女って、ま、まんまだな。違和感なしだな。（笑）
ってか、横で何かニヤニヤしている友人がいる。

こいつ…、絶対にブレイク起こして“白は俺の嫁！”とかやろうと思っているんだろうな。思い切り顔に出ているし…。

「ちなみに九尾の『尾獣』は植物を操作する能力があり、幽白の妖狐・蔵馬の様に魔界の食人植物を召喚することも可能だ」

何！！よくやった！クソ いや、神と呼ばせてもらおう！神！！
俺は初めて神を信じてもいいと思ったぞ！

「では、もう聞きたいことも無さそうじゃし、転生させるぞ」

神がそう言うと同時に、俺と友人は強い光に飲み込まれた。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

なるべくエミリアと違ったオリジナリティを出したつもりですが……

これで私的に軌道に乗ったつもりなんで、これからはカメ速度ですが、今回より速く次を出せたらと思っています。本当に……（汗）

エミリア
相方のコメント

いやゝ、漸くの投稿です。

志保は執筆速度が亀なので次回更新がいつになるか見当が付きませんが、温かく見守ってくれと、私もうれしいです。

そして、私の方もこれから頑張っていきたいと思えますので、相方共々よろしく願います。

第一話（前書き）

どうも、約2週間ぶりの更新です。

私はエミリア程執筆速度が速くないので、必然的に亀更新になります。

大体予想している更新速度は2、3週間置きです。

そんな亀更新でも見て頂けると幸いです。

第一話

ふむ……。どこぞのエロイトラック運転手のせいで天に召された俺は神のお陰で、ちゃんとうずまきナルトに転生できたようだ。

何故そう言い切れるかというと、俺の視界に最初に入って来たのが、三代目と御意見番と思しき3人の爺婆だったからだ。

この時、いきなり3人の爺と婆が視界に入れたことで不愉快な思いをした俺は、思わず一番近い爺の顎に蹴りを入れてしまった！！（笑）

……さて、時期的なものを考えると九尾事件が終わって間もない頃だと判断できる。だから、友人はとくに転生し終えているだろう。その内、サスケとも接触できるだろう。それまでは適当に過ごすかということ、ここからはサスケに会うまでの間の事をダイジェストで送ることにする。

まず、生後1カ月の俺。身体能力の確認をして、暴れ馬っぽいハイハイを試してみた。俺の背中に誰かが乗っていたらロデオの気分を味わえただろう。

ちなみに、爺は俺のハッスルっぷりに驚いて間抜け面を晒していた。ま、ロデオハイハイをかます赤ん坊などこの世に存在する訳もないんで、当然と言えば当然だ。

生後半年の俺。両足で立ち上がる。爺が歡喜して泣いていた。ほぼ

同時期に？チャクラ？を確認し、？チャクラ？による吸着の修行をした。周りの大人は俺を九尾として見てるので警戒していた。

1歳の俺。普通に話せるようになり、『呪霊錠』を着けてみた。……マジで2度目の死を迎えるかと思った。

2歳の俺。？チャクラ？の制御を完全にマスターし、術の訓練を開始。『螺旋丸』などを習得した。

ゲート・オブ・バビロン
『王の財宝』の能力と中身のある程度確認した。そして、最後に『内なる虚』を屈服と九尾を調教を始めた。

取り敢えず、自分の精神世界に行くことにした。ちなみに俺の精神世界は夜の草原だった。精神世界での最初の行動は『内なる虚』の搜索だ。

……搜索を始めて3分後。『内なる虚』を発見した。小高い丘の上で昼寝してた。腹が立った俺は『内なる虚』の鳩尾にエルボーをかました。

『内なる虚』は咽^{むせ}ながら起き上ると俺を一瞥し、再び寝転びやがった。そして、俺が再びこいつの鳩尾にエルボーをかます。この遣り取りが5回程繰り返された。

最終的にまともな話し合いが可能となったんだが、俺の『内なる虚』は面倒臭がりのようだ。俺が奴に“お前を屈服させる。故に戦え”と言ったら、“えゝ、かつたるい”と即答された。

しかも、“力を貸して欲しいなら言ってくれば、いつでも貸すよ。自分で使うのもかつたるいし”とまで言われ、あっさりと『虚化』

の制御が可能となった。

「虚化」についてはラッキーだったと思う。次は九尾の調教だ。……
つと言う訳で、今度は九尾が封じ込められてる牢屋を探そう。

『内なる虚』に案内を頼もうとしたが、“かつたるい”と即効で断られた。ただ、九尾がいるらしき方向は教えてくれた。更にその方向に向かえばサプライズがあると言われた。

サプライズ？一体なんだ？取り敢えず、俺は『内なる虚』が教えてくれた方向に向かうことにした。

…… あっ！言い忘れていたが、今の俺は16歳時のナルトの姿をしている。精神世界では自由に姿を変えられるようだ。

暫く歩くと信じられない物を発見した。保健所で犬や猫を入れて置く様な檻が草原のど真ん中であつたのだ。

いや、それ以上に驚くべき光景があつた。檻の前で俺の親父・波風ミナトとお袋のうずまきクシナが優雅に茶を飲んでいたのだ。

その後の展開を説明しよう。両親と会話し、親父とお袋の精神体が俺の中に居座っていることが判明。しかも消えないらしい。

会話終了後、九尾とバトル。俺は精神世界で初の『虚化』をし、九尾に攻撃をした。以下の文章を元に戦闘を想像してくれ。

[illegible]

『虚弾』……、『虚化』したら普通に使えました。で、これにより九尾の？チャクラ？を制御下に置くと何故か知らんが『輪廻眼』を手に入れることができた。しかも、オンオフが可能だ。

もし、オンオフができなかったら俺は絶望していただろう。だって、『輪廻眼』ってカッコ悪いし。

ま、暫くの間は封印しておこう。何故なら俺は最初から5つの『性質変化』を使えるので、『輪廻眼』を使って得られるメリットが殆ど無いからだ。

精々、死体を操作できるくらいだろう……。こんな感じで2歳の頃の大きな出来事は終了した。

3歳の俺。『虚化』の保持時間を延長する修行と九尾の？チャクラ？をコントロールする修行を主にし、来るべきの時のため、七夜の業や両義の業を再現しようと修行した。

ちなみに、2歳の時の『虚化』最高保持時間は1時間。現在の最高保持時間は7時間12分だったりする。そして、俺の中の九尾が偶に生意気になるので再教育したりしている。

そう言えば、俺が3歳ということはヒナタも3歳ってことになる。ということとは、ヒナタ誘拐事件が発生する年ということになる。

さて、ヒナタを守るためにも接触をしなければならぬが、どうしたものか……。……取り敢えず、公園にでも行っただけで考えることにするか。

公園に行くと、ガキどもが戯れていた。うるさいと考えがまとまらないので、手短な木に登り、太い枝に跨って考え事を始めた。が、だんだんと睡魔が……………。

俺が心地よく寝ていると、強い衝撃に襲われ、それと同時に目が覚めた。かなり頭が痛い…。俺の眠りを妨げるとは、いい度胸だ。フフ……………、殺してやろうか。

「いつてー！ー！誰だよ、一体！ー！？」

「アホ面のラーメン具材に鉄槌を加えたうちはサスケやけど、何か文句あるんか？」

そんな声をかけられた。目の前には

「！ー！？お前……………」

サスケがいた。

「おう。久し振りやな、ナルト」

「……………ああ。久し振り、サスケ」

偶然とはいえ、サスケと接触できた。正に怪我の功名。そして、ヒナタと接触することもできた。サスケ…、グッジョブ！

その後、3人で蹴鞠なんかの子供の遊びをして、周りが暗くなり始めると俺とサスケでヒナタを家まで送った。

そして、サスケの家に着くまでの間に俺とサスケはこれまでやってきた修行の内容を話した。

色々と話していたらサスケが聞いてきた。大方リボーンに登場する道具が収められているか、という話だろう、と予想する。

すると、見事に予想が的中した。そして、リングをくれとせがまれた。俺には使えない代物なんで渡したら、サスケは狂喜乱舞した。

サスケとの再会から2カ月。雲隠れの里との間で同盟条約が結ばれた。近々、ヒナタ誘拐未遂事件が発生する筈だから、警戒しないとな。そして、雲との同盟から数日後。誘拐未遂事件は起こった。

俺とサスケは昼間はヒナタと遊びつつ周辺を警戒し、夜は日向宗家の邸宅を交代で警護することにした。

雲が動いたら『口寄せの術』でいない方呼び出すことになっていたんだが、誘拐当日に俺は口寄せで呼び出された。

「ナルト。目標は北に向かってる」

背中におぶさってきたサスケがそう言い、それを聞いた俺は『ソニード響転』を使ってその場から移動した。

ちなみに俺は『虚化』の制御訓練をしている内に、『虚閃^{セロ}』なんかも使える様になった。

こうして簡単に先回りした俺たちは、忍頭がやって来るのを待った。そして

「!?!何者だ!?!」

忍頭がやって来た。しかも、俺たちに気付いて叫んだ。極秘任務のくせに、大声を出すとはバカか?

「……何だ、ガキか。悪いが、見られた以上死んでもらう」

忍頭はヒナタを抱えたまま忍刀を手にして襲い掛かって来た。まあ、『響転^{ソニード}』を使える俺には激遅の攻撃だ。

『写輪眼』を使えるサスケにとっても激遅の攻撃だろう。オタツキ一なサスケに言わせるなら正に“スロー過ぎて欠伸が出るぜ”状態だろう。

襲い掛かってくる忍頭に対して俺はフィンガースナップで音を鳴らした。すると、俺の指定した空間が歪み、その歪みから鎖が射出され、忍頭は鎖で雁字搦にした。

この時、忍頭はヒナタを手放してしまっていた。頭から地面に落下しそうになったヒナタを、俺は一瞬で助け、お姫様抱っこでキャッ

チしてやった。

ちなみに、忍頭を雁字搦めにしとる鎖は『エルキドゥ天の鎖』だな。必死に抜け出そうとしているが。まあ、そんなことさせる訳がないはずだろう。（笑）

「堕ちろ…。そして、巡れ」

サスケが『写輪眼』によって幻術を掛けた。忍頭をあっさりと気絶し、失禁した上に泡を吹いている。これで本当に忍頭なのだろうか？

そんなことを考えながら、俺は『エルキドゥ天の鎖』を解除した。そして、サスケが忍頭を縄でふん縛った。

忍頭を縛り終えた場合にヒアシが現れ、事情を説明した。なんだからで、俺とサスケは日向の屋敷に行くこととなり、火影の爺に説明することになった。

そして、雲の忍頭を生け捕りにした褒賞として、一度だけできる範囲内での願いを叶えて貰えることとなった。

俺はこの貸しを何に使うかはあらかじめ決めてはいる。だが、使わなくても達成できそうだな。（笑）さて、どうするか…。

その後、サスケが『呪霊錠』を付けてくれというから付けてやった。

「おい、ナルト！ハンデとして今から2年間は『呪霊錠』を解除し

とけ!!」

と、サスケが言ってきたが

「だが、断る!!」

「このうずまきナルトが最も好きなことの1つは“ Yes ”と答えると思っている奴に“ No ”と断ってやることだ!!」

「くっ! 確かに岸边露伴は俺らの正義……^{ジャスティス}。だが、お前に使われるとめっちゃム力つく!!」

こんなアホな会話があつたことを伝えておこう。

4歳の俺。取り敢えず、植物操作の修行をした。あと、サスケに匣^{ボックス}兵器と『Xグローブ』、『時雨金時』、『死ぬ気丸』とかをやった。

5歳の俺。サスケに誕生日プレゼントとして『龍神剣』をやった。そしたら、サスケがヒナタとのフラグを立て易い様に2人つきりになれる様に気を利かせる様にしてくれた。グッジョブ!!

他にはヒナタに妹が生まれた。ハナビだ。そして、何故か、サスケに妹が生まれた。名前はミカゲというらしい。何故かサスケがシスコンになっていた。もしやと思ってはいたが、やはり

6歳の俺。サスケとヒナタがアカデミーに入学する時期が来た。ちなみに今の俺は学年が上だ。ま、ワザと卒業試験に落ちて合流する予定だがな。この後、サスケと2人で訓練をする予定だ。

そして、俺はサスケと演習場で訓練を始める。今日は転生して初めて『魔眼』を使う。サスケもそうみたいだ。フッフ…、ハハハ！！
ついに、ついにこの時が来た！！

「取り敢えず、初使用やから木とか岩に向かって使おうか？」
「そうだな」

そう言い終わると俺たちは互いに近くにある木や岩の方を向いて、眼に力を集中させた。すると、何故か俺の視界に映る木が歪み始めた。

何だ、これ？と思ったとき、サスケの叫びが聞こえた。しかも、リアルジブリ。

「め、眼が！メガアーーーー！！！」

と、聞こえた瞬間、俺の腕に激痛が走った。

「ギヤアーーーー！う、腕が！！腕がもげるーーーー！！」

と、思わず叫ぶほど、マジで痛い…。つか、俺たちの身に何が起こった！？

第二話（前書き）

えゝ、長いことお待たせして申し訳ありません。

私は社会人のため、仕事に追われ更新できませんでした。

それでも読んで下さるなら、幸いです。では、どうぞ。

B y 志保

第二話

痛ッ！と声にならない声を上げそうになった。ありえんほどに腕に激痛が走った。具体的に言うとな腕をもがれた痛みだ。泣きそうだし…。

サスケの方を見てみると血の涙を流していた。はつきり言っただぞ。

この事態をサスケと解析してみたら、なんと『魔眼』が逆になった上にリスク付きという事実が判明した。俺達の反応はというと…。

「今度会ったら、確実に殺す！！」

「あんのクソ神がー！！」

という感じだ。要するにあの爺は晴れて俺達のブラックリスト入りというわけだ。

取り敢えず、サスケと話し合った結果、廃人にならない様に『魔眼』を使用するという結論に至った。なので早速、『魔眼』の使用持続時間を延ばす為の特訓をやることにした。

そして、忍^{アカデミー}者学校の上期が終了し、長期休暇に入っている程度経った頃。うちの居住区でサスケが一騒動起こしたって情報が入ってきた。

そう言えば、この間会った時にうちは一族の動きが怪しくなってきたってイライラしながら言ってたな。

そして、それから更に時が経ち、ある日の晩にサスケが家に来ていきなり土下座をした。

一瞬、何なのか分からなかったがサスケの話を聞いてようやく理解した。簡潔に言うなら、サスケが旅に出ている間、ミカゲを保護して欲しいとのことだ。

俺はサスケの頼みを了承し、ついでに『^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝』から魔道具を6つ、餞別として渡した。

サスケが旅立って数日後、俺は日向家に世話になることにした。ヒアシさんはあの事件後から、妙に俺を気に入ったらしく、二つ返事で快く承諾してくれた。

日向家に住むことになった晩、なぜか盛大な宴会が開かれた。その時、酔っ払ったヒアシさんが俺に

「ナルト君。なんならヒナタの許嫁にならないかね？」

と言ってきた。ヒナタも嫌じゃなかったみたいで、俺も満更でもなかったので承諾。その日の宴会は急遽、俺とヒナタの婚約パーティーの許嫁verみたいなものになった。

ここからが日向家で送った日常の描写の一部を送る。

「ところで、ネジよ。なぜ、俺をナルト様と呼ぶ？」

「それは、ナルト様がヒナタ様の許嫁だからです」

「それはそうだが…。俺は年の変わらないお前にそう呼ばれたくないと言わなかったか？」

「そう言われましても、私はナルト様を尊敬しておりますし、故にヒナタ様に相応しい方だと確信しておりますので、なんと言われましても変えるつもりはございません」

「なら、俺はこれからお前をネジ様と呼ぶがいいか？」

「それはなりません！」

「なら、やめろ」

「……仕方ありません。なら、ナルトさんと呼びます。これ以上はなんと言われようと譲りませんから！これで駄目なら、ナルト様にします！」

「…仕方ない。それで妥協案にするか」

この時、ここで妥協してなければ死ぬまで様付けされていた様な気がする。

次は日向家での修行風景（『呪霊錠』 & 『呪霊錠・裏式』、ヒナタ編）を送る。

取り敢えず、俺とヒナタが修行する場所は森が多いことを先に言っておこう。屋内戦闘もあることはあるが、忍は基本的に屋外戦が多いからな。

「で、ヒナタよ。今から君にあるものをかけるのだが、その説明

をしてもかまわないか？」

「で、って？」

「気にするな」

「うん。それをかけたら、ナルト君みたいに強くなれる？」

「なれるさ。ヒナタなら」

と、俺は太鼓判を押してやった。ま、正直ヒナタは原作の性格をどうにかすれば、才能は秀逸だから確実に強くなれるしな。だから、まず、自信を付けさせるようにしなければな。

「なら、付ける！」

「じゃあ、先に簡単に説明するぞ。今からかけてやる『呪霊錠』と『呪霊錠・裏式』というのは、？チャクラ？と身体能力に負荷を掛けて強化するものだ。

その負荷が非常に強力な呪法のこと、危険もそれなりに大きいがやるか？」

その言葉にちょっと怯んだヒナタだったが、何か思うところがあるのか改めて決意を宿した瞳で俺を見て言った。

「それでも、私はやりたい。ナルト君を支えられるようになりたいから。」

グハッ！！まさか、ヒナタがこんな（萌え的な）精神攻撃を使ってくるとは……。予想外だが素晴らしい。……。さて、気を取り直し

て

「わかった。全力でサポートするから、安心して修練してくれ」

この時、俺は多分顔を相当紅潮させてただろう。あつ！結果だけ報告するとヒナタは無事『呪霊錠』に耐えた。

次は日向家での修行風景（『呪霊錠』 & 『呪霊錠・裏式』、ネジ編）を送る。

ヒナタに『呪霊錠』をつけて数日後。俺がヒナタに修行をつけてることを知ったネジが自分も言っただけ来た。

まあ、宗家のことを恨んでないし、純粋に宗家の役に立ちたくての志願だから俺は二つ返事で承した。

で、ネジにも実戦式組み手や動きの最適化を指導してやり、ついでに、『呪霊錠』もかけてやった。ネジは七日かった。ちなみにヒナタは5日だった。

やはり、女性の方が痛みに強いと聞くから、その特性のせいだろうか？今日ほど男と女の神秘に唸ったことは無い。

次は俺の修行風景の描写の一部を送る。

俺は郊外の森に来ていた。理由は俺個人の修行をするためだ。やはり、人のいない場所ではないと危ないからな。主に、他人が…。

ふむ、手始めに七夜の業をやってみるか。そこらの大木に向かって俺は

「蹴り穿つ！」

と『閃走・六兎』を放った。すると、轟音と共に大木の幹に穴が開き、そこから折れて倒れていった。

ふむ、十分な威力だな。しかし、穴が開くとはさすが七夜だ。人間に放ったらかなりエグイことになるな。まあ、一般人には放たんが…。

よし、次はゾロの技でもやってみるか。そう思った俺は火影の爺さんに強請って買って貰った3本のチャクラ刀を抜いた。そして

「三刀流『鬼斬り』！！」

俺は岩に向かって技を放った。すると、岩は6等分になった。よし！と俺は満足した。だんだん、俺はテンションが上がってきた。次は大岩に向かって技を放つ。

「無明神風流『奥義・朱雀』！！」

すると、大岩は轟音を鳴らして粉々に砕け散った。よし、テンシヨ

ン急上昇〜！！が、爺さんから貰ったチャクラ刀が砕けた。どうやら
どうやら、チャクラ刀が『朱雀』を放つ時の勢い？に耐えられな
った様だ。それなりの業物って話だったから罪悪感が襲ってくるな
。テンションが少し落ちる。

よし！テンションを上げる為に『宝具』を使おう！！俺は『ゲイト・オブ・バ
ビロン王の財
宝』を開き、紅い槍を取り出す。

そして、その場から一気に助走し、跳躍。そして

「『ゲイボルグ突き穿つ死翔の槍』！！」

真名解放をした。すると、着弾点にクレーターができた。（笑）う
お〜！！何だかミナギツテキタ〜！！（笑）

次はアレだ！！俺は『ゲイト・オブ・バビロン王の財宝』から弓と某弓兵が使用していた例
のブツを取り出した。そして

「『カラドボルグ？偽・螺旋剣』！！」

空に向かって真名解放をした。すると、帰ってこなくなった。……
どうすればいい？…どうすれば　はっ！！呼んでみるか。

「帰って来い！」

俺が叫んだら空の彼方から帰ってきた。アレには『筋斗雲』と同じ様な特性もあるのか？そんなことを思っていると『カラドボルク？偽・螺旋剣』は勢いを殺さずにこっちに向かってきた。

ヤバイ！と思った時には既に目前に迫ってきていた。俺は慌てて手を前にかざし、前面に『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から取り出した『宝具』を展開する。

「『ロー・アイアス熾天覆う七つの円環』！！」

真名解放をして防ぐ。ふうー…、マジで死ぬかと思った。洒落にならない。自分で放った攻撃で死ぬとか。

つか、アイアスの花をガリガリ削ってるんですが、これはまだ絶賛ピンチ中か？と冷や汗が出た。

ど、どうすれば、止まるんだ？このままではいくら？チャクラ？を送り込んでアイアスを強化しても突破されるのも時間の問題だぞ？

……ん？チャクラ？そうか！！『カラドボルク？偽・螺旋剣』に送っているチャクラを止めればいいんだ。パニックって思いつかなかったわ。

暫くして、カラドは止まった。こいつは某弓兵の切り札だけあって、突破力の威力は凶悪だな。使いどころを見定めなければヤバイな…。

他にも、試したかったが、ヤバそうなので止めとくか。と言うか、周りの森が荒野になっている。どうしよう……。

そうだ！九尾の植物操作の能力で再生させるか。なら、すぐさま、実行、実行っと。

「と、こんな感じでいいかな？」

と周りを見渡してみると…、さっきまでの普通の森が、いつの間にやら魔の樹海になってしまった。

「しまった。この能力の便利さにテンションが上がって調子に乗ってしまった。」

ま、これはこれでいつか。どうせ人里離れた所だし。うん、後悔も反省もしていない。ほ、本当だぞ？こうして、俺の修行のある一日が終わった。

後日、その樹海は富士の樹海の如く噂が立っていた。そして、いつしかその不気味さから『物の怪の樹海』と名付けられた。

……ま、見た目がもののけ姫に出てきそうな森になっちまったから、当たらずとも遠からずだな。

第二回！日向家で送った日常の描写の一部を送る。

ある日、修行を終えて日向家に帰る途中での出来事だ。

「待て！うずまきナルト！！」

俺は後ろから急に呼び止められた。振り向くとそこにはその他大勢の男達が立っていた。

「なんだ？お前達は？」

と言うと、代表者らしき奴が一步前に出て、口を開いた。

「我らは日向ヒナタ様を愛する“ハグして、ハグして、ヒナタ隊”！略して、H・H・H隊だ！！」

と言いやがった。成程、こいつらは変態と言う名の紳士なんだな。見た目が明らかに十代後半だし……。ってか、どこのSHUFFLE E！！だよ。

あつ！SHUFFLE！！と言えば、俺にはトラウマがあるんだよな。読者にもトラウマを持つてるのがいるかもしれない。あの空鍋。

いや……、あの眼のハイライトが消えた楓が空の鍋でお玉をかき回

してるシーンは壮絶だった。

「
誅が降るぞ!!」

おっと！俺がどうでもいいことを考えている間も代表者が言葉を續けていたようだ。

「スマン。途中から聞いてなかった。もう一度言ってくれ」

「何!!?.....まあ、いいだろう。.....コホン！うずまきナルトに忠告する！ただちにヒナタ様との許婚の関係を破棄しろ!!でなければ、天誅が降るぞ!!」

何を言ってるんだ、こいつら?ってか

「明らかに人誅だろ?」

と言ってやったがそれも無視して、変態という名の紳士　もう変態でいいか。変態共は、自分達がどれほど想っているかなどのたまい始めやがった。拳句には

「よって、ヒナタ様は我らのモノだ!!」

最期に代表者がそう言って終了した。女性をモノ扱いするセリフ。それを聞いた瞬間、俺はキレた。

「

!!」

この日、この通りに狂戦士バーサーカーが現れるという都市伝説の様なものが生まれた。

ちなみに俺はそんな者には出会っておらず、何故か手を通つ赤な何かに染めて、頬にはケチャップ的なもの付けていた。そして

「いい仕事をした」

と独り言を呟き、腕で汗を拭った。ちなみに変態集団はこの日の内に壊滅。最後の台詞が

「我らを潰しても、第二、第三の我らが必ず天誅を降す!」

どこの魔王だよ…。ってか、その台詞は死亡フラグだ。

第二話（後書き）

こんばんは、志保です。

というわけで、二話でした。

最後のは、明らかにネタに走りたくて書いてみましたw

そして、今回読んで下さった皆様ありがとうございます。

今回はデータが吹き飛ばし、仕事が忙しくなるし、と散々でした。

仕事も安定期的なものに入ったので、今回みたいに次回は遅くならないと思います。

それでも、私の執筆速度は亀なので、早く更新は出来ませんが、一応、今月末ぐらいまでにはもう一話更新しようと思っています。

こんな私の作品をこれからも読んで頂けるなら嬉しいです。

第三話（前書き）

えー、予定より遅れて申し訳ありません。ようやく完成しました。
難産でした…。

というわけで、どうぞ。

第三話

ある日、どこかの馬鹿サスケがうちの虐殺の後に妹を保護してくれとか言って里を出て行った。恐らく、旅の目的は嫁探しだろう。

そんなバカが気ままに旅をしていた頃、俺はというと長期休暇が終了アカデミーしたことで忍者学校に登校していた。

しかも、思い付きで憧れでもある原作のナルトが対ペイン戦で羽織っていたダンガラ模様の羽織を自作して、それを羽織って登校した。俺の格好を見た同級生や先生が驚いていた。先生側の驚き恐らく俺の姿が四代目と重なったからだろう。元々、容姿は親父似だから尚更か。

同級生が驚いたのは羽織に書いてある文字のせいだろう。なんせ、書いてある文字は“天上天下唯我独尊”だもんな。

ま、俺の人生のスローガンのように考えて書いたわけだが…。他者から見れば驚きだろう。そんな訳で他者に少々驚きを与えながら長期休暇明けの登校をしたわけだ。

……そういえば、卒業試験はいつ頃やるんだろうか？取り敢えず、俺はヒナタと同期になる為にワザと卒業試験を落第しようと思っている。

原作合わせという意味合いを兼ねてな。そんな感じでのりくらりとぬらりひよんの様に生活していると、ついに1回目の卒業試験がやってきた。

当然、俺は態と卒業課題を失敗した。原作ナルトが中忍試験本戦で言ってたが、卒業試験は『分身の術』だった。

多分、次の卒業試験も『分身の術』だろう。次回も同じ感じで落ちるつもりなんで、その描写は割愛させて頂き、今回は原作開始までの出来事を話そうと思う。

まず、俺は授業そっちのけで、自分の修行を主にしていた。例えば、『^{ホロウ}虚化』の維持時間向上とか、新技の開発とか、九尾の能力のコントロール制御とか、体術の動きの最適化とかをしていた。

取り敢えず、『虚化』は、『^{ゼロ}虚閃』のバリエーションである『^{グラン・}王虚^{レイ・ゼロ}の閃光』とか『^{ゼロ・オスキュラス}黒虚閃』を試してみた。

いや、普通に空間が歪んだね。空間に影響を与える攻撃ということ考えると、『^{エア}乖離剣』の『^{エヌマ・}天地乖離^{エリシユ}す開闢の星』といい勝負かな。

ちなみに、『^{グラン・レイ・ゼロ}王虚の閃光』や、『^{ゼロ・オスキュラス}黒虚閃』を使ったのは木ノ葉の里から少し離れた火の国の森だったんだが、使用時の空間の歪みが里からも観測できた様で俺が去った後に暗部が俺のいた場所に調査に行ってた様だ。

里に戻ると何故か都市伝説っぽいものになっていて、里の爺さん婆さんが“天変地異の前触れじゃー！！”とか言いながら、歪みが観測

された方角に祈祷をしてた。

そういえば、うちはマダラの攻撃無効化能力も空間そのものに影響を与える『王虚の閃光』^{グラン・レイ・セロ}や『天地乖離す開闢の星』^{エリシユ・エヌマ}には意味が無いかもな。

諸悪の根源たるうちはマダラに会うのは第二期からだから確認のしようがないが、会った時には試してみよう。

他に修得した技といえば、るろくに剣心に登場する新撰組三番隊組長・斎藤一の必殺技、『牙突』か？突きの勢いと突進力の相乗効果で拳大の石を粉々にできる。

あとは戦国BASARAの伊達政宗の六爪流を修得した。無論、性質変化を使って『HELL DORAGON』^{ヘル ドラゴン}を使える。

ちなみに初めて『HELL DORAGON』^{ヘル ドラゴン}を使った時、その力に耐え切れずに使った刀が全て砕け散った。

他に修得したのは、とあるの科学の超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴の必殺技である『超電磁砲』^{レールガン}だな。一度、やってみたかたんだよね。

が、いざ修行をしようとしたら問題が発生した。この世界の通貨は紙幣なんでコインが無い。と、いう訳で忍具店にオーダーメイドでコインを作らせた。

ギャンブルの街である短冊街なんかに行けば、スロットルのコインとかがあるが距離も伸びないし、威力も低く、硬貨も燃え尽きてしまった。

ちなみに特注品コインの費用は自分持ち。一応、非公式とはいえ親父は四代目火影だったこともあり、親父だけでなくお袋も死んでいるので、莫大な両親の遺産がある。

特注コインを使つての『超電磁砲^{レールガン}』は飛距離も威力も段違いに上がった。具体的に言うなら飛距離は御坂美琴の倍、威力に至っては1.5倍だ。そんな感じで修行の日々を過ごしていた。

勿論、修行だけでなくヒナタとの仲を深めるためにデートに誘ったりもした。そのお陰でちょっとしたグルメになった。

そして、馬鹿^{サスケ}が旅に出て3年程経ったある日、ハナビが俺に修行をつけて欲しいと頼んできた。

最初は、まだ幼いハナビに修行をつけるのは嫌だったので断ったのだが、あまりにもしつこく頼んできており、ついには

「何故、ヒナタ姉様は良くて私はダメなのですか？」

と涙を溜めて訴えて来るので修行をつけてやることにしたのだった。まあ、要するに泣き落としに負けたんだけどな。子供で女で泣き落としては卑怯だよな。…………ハァ。

ハナビの修行は戦闘慣れをする為に主に組み手をしてやった。そして、例によってハナビにも『呪霊錠』をかけることになった。

この経緯については察してくれると助かる。言っておくが、ハナビに『呪霊錠』をかけたのはある程度修行して基礎が身に着いてから

だけだな。

というか、この姉妹化け物だ。ヒナタは三日で修得してしまうし、ハナビに至っては二日で修得した。俺でも五日掛かったのに……。チートなのに……。自信無くしそうだ……。

因みにハナビは俺のことを“ナルトさん”と呼ぶ。どうせなら“ナルト兄様”と呼んで欲しい。将来的にはヒナタと結婚して本当の義兄さんになるんだから。

が、ハナビは俺の内心を知ってか知らずか、例の泣き落としの姿の可愛さに萌　ゴホンッ！いや、当てられてついつい屈してしまった。

最近は味を占めたのかその技を使用して多々頼みごとをするようになってしまった。更にヒナタにも教えた様で、ヒナタも使用し始めた。

初めてヒナタに使用された時、俺は“一体なんの精神攻撃だ！”と思った。その可愛らしさ、愛らしさたるや、俺のライフを一気に追いつ込むほどのダメージを与えるほどだ。

最初の時など、危うく昇天しかけた。ぶっちゃけ、“もう止めてくれ！俺のライフはもうゼロだ！！”と俺の中の天使が叫んだほどだ。だが、やはり“可愛いは正義！”だな。あれに男どもは騙されてもついつい許してしまうのだろうなあ。俺もだが…。（笑）

まあ、そんなこんなで姉妹に修行をつけることになった。

ハナビの修行を初めて暫く経ったある日、今度はミカゲが俺に修行をつけて欲しいと頼んできた。情報源は言うまでもなくハナビだろ
うな。

ミカゲの思惑は手に取るようにわかるぞ。どうせ、あの親友^{バカ}のため
だろうな。一応、何故強くなりたいのか確認を取ってみると、案の
定

「サスケ兄様が帰って来た時に驚かせたくて…。それとサスケ兄様
を支えたいから」

と赤くなりながら、惚気てたぞ。クソッ、こんな健気な妹を
置き去りにして、明らかに嫁探しに行きやがって、シネッ！シスコ
ン！

こうなったら、油断してたらあいつでも危ないほど鍛えといてやる
う。それがせめてもの意趣返しだ。

ちなみにうちの事件はサスケが旅に出た約1年後に起こった。ミ
カゲの家は長男が事件を起こして逃亡、次男が放浪中、両親は事件
で死亡。事件発生直後はある意味天涯孤独の状態だ。

しかも、その時のミカゲの年齢は1歳。1人で生きることなどでき
る訳もなく、バカの頼みでもあったのでヒアシのおっちゃんに頼ん
で日向家で保護して貰った。

さて、話は変わるが俺の許嫁のヒナタは結構嫉妬深いみたいだ。何
故なら俺がそれなりに綺麗な女性に目をやるだけで、腕を抓るか足

を踏むかしてくる。

極めつけは、一時期同期で結構仲が良かったテンテンとヒナタがない時に話した後、ヒナタに会った時はヤバかった……。いきなり

「なると君カラ、他ノ女ノ人ノ匂イガスル……。ネエ、なると君？私
ガイナイ間ニ誰ト会ツテタノカナ？カナ？」

と、顔は笑顔だけど、目が全然笑ってない表情を向けてくるものだから。なまじに顔も整っているせいか迫力があり、すごい威圧感^{プレッシャー}を出してたので、こっちは冷や汗ダラダラと流しながら

「ヒ、ヒナタ落ち着こう。というか、俺の話を聞いてくれ！だから、
柔拳の構えはやめろ！！」

「ハナシ？」

「おう。今日はただクラスメイトの友達のテンテンにあってただけ
だって！」

「フーン？ソノ割ニ八名前ヲ呼び捨てニサレルホド、仲イインダ？」
「いやいや、ホントただの級友だから！」

と、俺は必死に説得したが

「フーン、ソナナると君ハアッチデOHANASIシヨウカ？」

と、俺の襟首掴んで引つ張られる。つか、ヒナタ目がハイライトになってる上、言葉遣いが片仮名になってるぞ！しかも、俺の名前は平仮名になってるし！！

その後、ボディーに掌底を繰り出され、気絶させられたかと思うと地下室つばい所に監禁され……、その後は恐ろしくて思い出したくも無い。

そして、ウザイのがうちはアキトだ。何かとミカゲを狙って襲撃してくるし、その邪魔を毎回俺がしているせいか、最近俺を目の敵にしてきた。マジでウザい！！こちとら、眼中にないのに。例えば

「卒業試験落ちたドベ野郎が邪魔すんじゃねえよ」

と、こんな風に名前すら呼ばない失礼さ。つか、何故にドベ？取り敢えず、イラついたこともあって言い返すことにした。

「そのドベに毎回邪魔されるお前は何なんだろうな？」

「フン！俺がドベ相手に本気になるなんて大人気ないことをできる訳が無いだろう」

いやいや、お前は子供だから。つか、5歳も年下の女の子を狙ってお前は十分に大人気ない。まず、そのことに気付こうな。

ってか、マジでいい加減面倒だしウザくなってきた。…消そうかな？けど、処理とかが面倒だ。仕方がない。今度から奴は適当にあしらうことにしよう。

そんなこんなで、あつという間に火影の爺さんと約束してた旅の期間が終了したようで、馬鹿サスケが帰ってきた。しかも、女を3人も連れて……。

やはり、嫁探しだったか。……そう言えば、サスケはチャクラ刀の刀匠になってたな。よし、後でねだりにいこう。もしくは、物々交換で造ってもらうか。

お、アイツ俺を見てなんか驚いているな。恐らく俺が羽織ってる羽織が原因だろう。ヒナタの方を見て驚いているな。まあ、これはヒナタが原作二期の服装で、更に髪型がロングだからだろうな。

つと、そんなことを考えてる内に話が進んでたみたいだ。どうやらサスケは同期の男子を全て敵に回したみたいだな。女子も汚物を見る様な視線だ。

お、ヒナタがサスケに汚物を見る様な視線を送ってたかと思うと、今度はサスケ嫁sに羨む様な眼差しを向けてる。何故だ？

そう思っていると、今度は俺に視線を向けていた。しかも、例の涙目の上目使いだ。目は口ほどにモノを言うをこれ程までに体現してるのはいないだろう。

ちなみにヒナタの目が語ってきたのはサスケ達と同じ位ラブラブしたいというものだった。なるべく構う様にしよう。

つか、ミカゲが凄いことになってるな。さっきまで、感動で涙目になっていたのに、婚約者宣言から目をハイライトにして、射殺さ
んばかりにサスケの嫁、sを見てる。あれは、ヤバイな。

取り敢えず、俺はこの後に起こるだろう悲劇（喜劇）を傍観するこ
とにしよう。……………これでようやく原作開始か。どうしようかな？

第三話（後書き）

とついうわけで、どうでしたでしょうか？今回は難産で、手こずりました。

なかなかネタが思いつかなく。やはり、有名な白い悪魔ネタを使うことになってしまいました。

こんな私の作品を今回も読んで頂きありがとうございます。

今後も頑張って執筆していこうと思います。

B
y

志保

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2936m/>

2人の転生者 ナルトside

2011年2月6日17時25分発行